月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１２７号　令和元年１０月１５日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

弓道部中 41 回卒業生(1942 年３月)（右上）弓道部顧問の斉藤文雄先生(前列左から２番目)と山崎利市先生。後列左から２番目が加藤雅彦君。
亀城公園を出発する中 41 回生(香取・鹿島方面剛健自転車旅行)（下）
(いずれも「中 41 回卒業アルバム」より転載)

戦火の中で

中 41 回生は、アジア太平洋戦争開戦後の 1942(昭和 17)年３月の卒業。それぞれの道を歩み始めましたが、法改正により、1943 年から兵役編入年齢が 19 歳に引き下げられたため、彼らは、1944 年後半からは続々と入営し戦いに赴きました。今号では、つくば市小田在住の加藤雅彦先生から伺ったお話(2019 年９月 13 日、ご自宅で、高 21 回松井泰寿・鴻巣茂が、先生の山口小時代の教え子である大久保勝弘氏とともに伺った。)と中 41 回卒業 52 周年記念文集『花筏』(1994 年発行)とから、中 41 回生の足跡を辿ってみます。
文中の【　】内は筆者による注記です。

土浦中学入学

私は、1925(大正 14)年生まれで、1937(昭和 12)年４月、小田尋常小学校から土浦中学に進学しました。通学は自転車。小田からは大関(旧姓岡田)清・広瀬昇と私。斗利出から大芦進。藤沢から田崎武男・野口六弥・福島寛が加わり、７人で国道 125 号を５年間、雨の日も風の日も、真鍋台まで往復約 30 ㎞の道程を通い続けました。入学当初の私は、身体が小さく、サドルに腰掛けるとペダルに足がやっと届く程度で、身体を左右に揺すって自転車を漕いでいました。その後ろ姿を見て、父親は心配でならなかったそうです。当時は、国道と雖も砂利道で、その上しょっちゅう工事で掘り返していたので、道路凸凹部にハンドルを取られ、自転車から転げ落ちて、工事現場に突っ込んでしまったこともあります。冬になると、霜解けで泥がタイヤにこびりつき、思うように走れません。帰りは筑波颪が向かい風となり、真冬でも大汗を掻いて帰宅しました。

入学した年の７月７日から日中戦争が始まりましたが、中学生活は、まだのんびりとしたものでした。家での予習・復習などしたことがなく、成績は中の下くらい、漸く進級できた程度でした。

弓道部

部活動は、身体が小さかったことや父が弓道をやっていたことから、弓道部に入りました【「弓道部」の活動は 1932(昭和７)年頃から始まり、1939 年４月に進修会(生徒会)から部として正式に認められた。】。３年生となった 1939 年の２学期には、中国戦線に出征していた教練科の山崎利市先生が帰還され、顧問に就任されました。修養に修養を積んだ立派な精神と素晴らしい腕前の山崎先生が、毎日熱心に指導してくれたので、部員の進歩には目を見張るものがありました。山崎先生と一緒に、練習に、競射に、一心に励んでいる放課後、的中の快音を聞くのが何よりの喜びでした。

最上級生となった 1941 年には、第５回帝国商業主催靖国神社奉納全国中等学校弓道大会【出場 30 校】に出場しました。土浦発６時 47 分の列車で上京。会場は能楽堂前仮矢場。選手は、いずれも５年生の矢口保・山崎文男と私の３人。矢口・山崎は調子が良く、山崎は個人戦優勝戦も争いましたが、惜しくも敗れました。私の調子が悪く、団体としては 12 射中５中で７位に終わってしまいました。私がもう少し的中していれば入賞できたのに、と帰りの車中で敗残の兵の無念を噛み締めていました。

香取・鹿島方面剛健自転車旅行

土浦中学では、５年生での関西への修学旅行が恒例となっており、生徒たちの最大の楽しみとなっていました【先生方には最大の苦労となっていたようですが。】。私たちも、当然実施されるものと思って、待ち焦がれていました。しかし、どういうわけか、関西旅行は取り止めになってしまいます。私たちが不始末を仕出かしたわけでもなく、今もって理由は分かりません。それに代わって、１泊２日の自転車旅行が行われました。1941 年６月 27 日、霜降りの夏服にゲートルを巻き、肩から水筒を掛けた私たち５年生は、亀城公園を出発。凸凹の砂利道に自転車を走らせ、佐原に向かいました。香取神宮を参拝。その夜は鹿島神宮門前の旅館に宿泊しました。夕食に鯉の洗いが出ましたが、雷魚の洗いだったという話もあります。翌朝、鹿島神宮を参拝して土浦に戻りました。全行程 120～130 ㎞はあった筈です。私たちは、関西旅行が中止になった腹癒せもあり、体力に物を言わせてぶっ飛ばす者もいて、引率の先生方はさぞお疲れになったと思います。生徒の中にも尻が痛くなって閉口していた者もいましたが、私は、日頃の通学のお蔭か、何ということはありませんでした。

卒業

アジア太平洋戦争開戦の興奮が冷めやらぬ 1942 年３月に土浦中学を卒業し、私は、日立鉱山工業技術員養成所に入所しました。鉱山技術者を養成する学校で、日立市の諏訪台に校舎があり、生徒数は 150 人ほどで、各地の鉱山技術者の子弟や鉱山会社から派遣されてきた社員など、年齢差のある生徒が全国から集まっていました。校舎と棟続きに寄宿舎が建てられており、全員が寄宿舎に入っていました。学費と寮費は日立鉱山(㈱)が負担してくれて、小遣いだけを家から送ってもらいました。寄宿舎では１部屋に２～３人が入り、年長者が部屋長を務めていたと思います。養成所での講義に加えて、本山での採掘、大雄院での精錬実習もありました。鉱山では何千人もの工夫や作業員が働いており、日本有数の軍需産業であることがよく分かりました。日曜日に日立出身の生徒の実家を訪れたり、映画を見に行くくらいで、他にすることもないので、寄宿舎では毎日勉強をするようになりました。そのためか、最初の試験では学年で４番になり、自分でもびっくりしました。卒業時も７番。土中時代には考えられなかった成績でした。1943 年の４月に日立鉱山精錬課に就職。大煙突のあった大雄院の精錬所で働き始めました。しかし、漸く現場の仕事に慣れてきた 1944 年に 19 歳で現役召集され、世田谷の野戦重砲連隊に入営しました。幹部候補生グループで初年兵教育を受け、尚且つ甲種幹部候補生にされてしまいました。これは、土中の山崎先生のお蔭（「教練」の成績を良くしてくれていたのだと思います。）だ、と今でも感謝しています。その後、桐生にいた鉄道部隊に配属替えとなり、そこで終戦を迎えました。私は、召集されたお蔭で、日立の空襲や艦砲射撃に遭わずに済みました。更に、戦地にも行かずに済みました。同級生の中には戦死した者

や外地で苦労した者もいます。私は本当に運が良かったと思っています。

死線を越えて

中41回生の中には、外地で終戦を迎えた者も多数いました。1944年に応召した樋野水雄は北京郊外の万里の長城の八達嶺で、梶田豊は河北省石家荘で、1945年3月に東部第三七部隊【水戸】に入隊して、最後の外地往きとなった菊池英雄は山東省青島で、それぞれ敗戦の悔し涙を流しました。また、松井泰雄は、宇都宮高等農林学校(現宇都宮大学農学部)から、1944年に陸軍特別操縦見習士官に志願し、熊谷陸軍飛行学校教育隊で特攻訓練を受けた後に、同年末に南方派遣を命じられました。しかし、台湾沖で輸送船が敵艦載機の襲撃を受け沈没、漂流9時間半、海防艦に救助され、台湾に上陸。1945年3月に歩兵連隊に転属を命じられ、そこで終戦を知りました。幸い、彼らは同年末から翌年半ばまでには復員できましたが、満州で終戦を迎えた大関(岡田)清・前原文雄・横山恵一らは、シベリア抑留の苦難を強いられました。シベリアでの抑留生活を横山恵一は、「シベリア回想」(『花筏』所収)と題して次のように綴っています。

「戦後五十年。あの悲惨な戦争も、人々の記憶から忘れ去られようとしている今の平和な日本。

六十九年の齢を重ねた私の人生からみれば、一年八ヶ月のシベリア抑留はほんの短日時と言えるが、人間の極限状態にあった『ブカチャチャ収容所』での体験は、今なお一生涯の忘れ得ぬ思い出として、脳裡に焼きついて離れない。

三重の鉄条網に囲まれた異境の地で、故郷を、帰国を夢見ながら無念の涙を流した、尊い犠牲者千数百名(収容人員の約四分の一)。一人一人の悲痛な心の叫びが聞こえてくる思いである。

零下三十度を超す厳寒の山林での伐採。手や足の感覚がなくなるが、凍傷を防ぐために休むわけにいかない。絶えず身体を動かし寒さに立向かう。はかどらぬ作業にロ助【ロシア兵】が自動小銃で威嚇する。言語に絶する苛酷な作業。

ノルマ(割当て)に追われる石炭採掘積込作業。ノルマ達成が帰国に繋がる唯一の道と信じ体力の限りを尽くす。シャベルが上がらずトロッコに入るのは二分の一、三分の一。「ダバイ(早く)」。ロ助の鋭い声が飛んでくる重労働の毎日。

こんな中で唯一の楽しみが食事。白樺の皮を燃やした鈍い光りの下で黒パンを十数等分に切る。ギラギラした瞳がこの一点に集中する。何ともいえない重苦しい空気。一片の黒パンに数十粒の大豆が浮いたスープ。最悪最少朝晩二回。これが生命を支える尊い食物。

極寒。重労働。飢餓に苛まれ、虱の媒介による発疹チブスや栄養失調による死亡者が日に日に増える。素裸でコチコチに凍った遺体を枯木を重ねるように墓穴に埋める。こんな悲惨な、残酷なことがあってよいものだろうか。

頑健な私も、心身共に使い果たし、栄養失調で痩せ衰えついにダウン。目を覚ますと、まだ生きていたか、とやり切れない入院生活三ヶ月。

この入院が幸いし、病人として二十二年四月引揚五船目で故郷の土を踏むことが出来た。」

友を悼む

しかし、再び故郷の土を踏めなかった者もいました。そうした友を悼んで山口裕は、『花筏』に「目黒静君のこと」と題する一文を寄せています。

「太平洋戦争では多くの友を失った。生きていたら輝いたであろうにと思う。その中でも今も多くの友人の追憶に生きている人物に目黒静君、富岡崇吉君がいる。目黒君は私にとって因縁が深いので、特記することにした。

彼とは中三を除いて同クラスで、【石岡から常磐線での】汽車通学では加茂川【廣行】君と三人いつも一緒であった。勉強以外のことで、いろいろ教えられることが多かった。彼の頭脳明晰さは格別ながら、そのストウィックな人柄、理化学的知識や理解、趣味と教養の深さも格別であった。

海軍経理学校在学中、日曜日には屡々世田谷の小生の居所を訪ねてくれた。その時の話題はいつもサイエンスで、飛行機、望遠鏡、無線、天文、化学、音楽等々尽きなかった。海経【海軍経理学校】の八ヶ岳登攀訓練の折の眼下の雲海に映る円形虹の話も印象に残っている。ブロッケンの怪物現象だった。北アルプスの尾根路でこの現象を見る度に彼を思い出す。

昭和十九年三月、海経卒業の彼は、戦艦武蔵乗組で出陣したが、そこで【同級の】田上松男君のお兄さんと遭っている。その年の秋、彼は呉鎮【呉鎮守府】所属の第三十号掃海艇の主計長としてレイテ作戦に赴いたが、その後の消息は不明であった。戦争は最終段階に入り、小生は海軍薬剤科短現【短期現役士官】(注2)で呉海軍病院配属となった。病院は銃爆撃で破壊されたが、三たび奇蹟的に助かった。

ある時、第二十九号掃海艇の衛生兵曹が治療品受領に来た。心躍り第三十号掃海艇の消息を尋ねたが、オルモック水道で沈んだらしいとのことで、目の前が暗くなった。戦後調べたところ、そこはレイテ島とセブ島の間で【1944年】十一月十二日のことであった。小さな島の多い所で、もしやどこかに泳ぎ着いているかもしれぬと思っていたが、彼は帰らなかった。

戦後分かったことだが、小生が呉で銃爆撃を受けていた頃、加茂川君【海軍兵学校73期】は港内の空母葛城の高角砲分隊士として敵機を迎え撃ち、危機の中にあったことや、呉病院に収容された二六〇〇名余の重傷者の中で見た少年兵が彼の部下だったことを知った。戦争のさ中でも、いろいろな因縁があるものだ。

目黒君戦死の状況記録探索の中で、富岡君【海軍兵学校73期】が二十年四月七日、神風特攻第三御楯隊長として、奄美大島近海の空母バンコックの艦隊に突入散華したことが分かった。

太平洋戦争は多数の前途有為の人材を徒に死なせてしまった。生きていれば戦後の日本で輝いていたであろうに、と今尚悔やまれる。戦争指導者達は勝算のない自棄的な戦略で、戦争終結のシナリオも無く、ポツダム宣言の中の戦争責任追及の文言に怯え、内に対しては面子にこだわり、都市焦土化、特攻、原爆という破局にのめり込み、大日本帝国を滅亡させた。今我々の生きる日本は、過去の体制とは根本的に違うという認識を持っているが、若くして大日本帝国に殉死させられた友人達を忘れることはできない。目黒君は今は所沢市聖地霊園に両親と共に眠っている。戒名『彰光院義岳静海居士』として。」

(注1)**日立鉱山**

茨城県日立市にあった鉱山で、主に銅と硫化鉄鉱を産出した。1905(明治38)年以前は赤沢銅山と呼ばれていた小鉱山であったが、同年、久原房之助が経営に乗り出し、日立鉱山と改名され、本格的な開発が開始された。久原の経営開始以後大きく発展し、同年から、閉山となる1981(昭和56)年までの76年間に、約3000万トンの粗鉱を採掘し、約44万トンの銅を産出した日本を代表する銅鉱山の一つとなった。日立鉱山を母体として久原財閥が誕生し、久原財閥の流れを受けて日産コンツェルンが形成され、また日立鉱山で使用する機械の修理製造部門から日立製作所が誕生しており、日立鉱山は日本の近代産業史に大きな足跡を残している。

(注2)**短期現役士官**

大日本帝国海軍が旧制大学卒業者などを対象に、特例で、現役期間を2年間に限って採用した士官のことで、正式には「二年現役士官」と呼ばれる。「短期現役(短現)」という呼び方は俗称で、本来は、徴兵制度の特例で師範学校卒業者を対象とした短期現役兵のことを指す。二年現役士官の制度は、海軍士官のうち兵科・機関科以外の部門である将校相当官について設けられ、軍医科・歯科医科・薬剤科・技術科・主計科・法務科などがあり、特に、アジア太平洋戦争中の短期現役主計科士官が知られる。

(高21回　松井泰寿)